

景観フォーラム

巻頭言

トランプ劇場がまた始まった。自由主義の旗艦たる存在が「関税」か？核兵器廃絶時代に「防衛費増強」か？無知極まりない強情なこの男と世界は以降4年間も間付き合わなければならぬことになる。このドナルド・トランプという男とかのナチズムを率いたアドルフ・ヒトラーは酷似しているようである。が、時代は80年以上も経過しているし、民主主義の旗手であるアメリカ合衆国という国に生まれた男が、かの大量虐殺即ちホロコーストを実行せしめた狂気の天才に類似しているとはどういうことだろうか。

先ず、自分のカラーを出したがり、徹底的に自分よがりで、他人の意見を素直に聞かない。即ち、極めて独善的であるといふことだ。民主主義のお手本の国にいながら、民主主義に基づいた制度に則った方法で、物事を運営したがらない。そして100年前の米国の繁栄の在り方がすべてであると信じている。ヒトラーが信仰していたアーリア人が最良の人種であるという選民思想に酔いしれていたように、トランプも恐らく白人至上主義が心の支えとなっているではないかと思われる。

では、ヒトラーが心に描いていた世の中の素晴らしい風景とはどういうものであったろうか。想像するに、それは、ヨーロッパが産み出した様々な芸術様式を統合し、自由主義を超越したアートの国家創造というものであったろう。だが、ヒトラーは民主主義が生み出した化け物と化した。それではトランプの素晴らしい世の中とはどういう景色であろうか。残念ながら、トランプにはヒトラーほど知性がないので、出来合いの出されたものを喜んで食べる飼い犬の如く故郷のフロリダ以上の景観は想像できないだろう。兎も角も、フロリダこそが天国であるからして、彼の頭にはニューヨークの景観は論外ではないだろうか。我々はトランプ政権に於いて民主主義が生み出す化け物を注意して見極めなければならない。“王”と呼ばれ始めてはいけないのである。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 斎藤全彦

＜日本景観フォーラム 2025 年度年間スケジュール＞

*2025 年度とは 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日のことです。

2025 年

- 4月22日（火）**第1回景観研究会** 総会・第1回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5月15日（木）**第1回景観まちあるき**【池袋】
6月24日（火）**第2回景観研究会 オンライン（16:00～18:00）**
7月26日（土）**第2回景観まちあるき**【秩父】
8月 夏休み
9月24日（水）**第3回景観研究会**
10月25日（土）**第3回景観まちあるき**【水戸】（検討中）
11月18日（火）**第4回景観研究会**
12月18日（木）忘年会【恵比寿】

2026 年

- 1月24日（土）**第4回景観まちあるき**【野田】（検討中）
2月24日（火）**第5回景観研究会**
3月28日（土）**第5回景観まちあるき**【横須賀】（検討中）

■以上のスケジュールは、ご提案ですので隨時皆様のご意見を反映してまいります。

＜日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール＞

*2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

2024 年

- 4月23日（火）**第1回景観研究会** 総会・第1回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5月12日（日）**第1回景観まちあるき**【アークヒルズ】
6月25日（火）**第2回景観研究会**（18:00～20:00）於：JICA オフィス
9月 7日（土）**第2回景観まちあるき**【代官山】
9月24日（火）**第3回景観研究会**（18:00～20:00）延期
10月21日（月）**第3回景観まちあるき**【洗足池】
11月19日（火）**第4回景観研究会**（14:00～16:00）オンライン会議
12月26日（木）忘年会【恵比寿】中止

2025 年

- 1月7日（火）新年会【目黒】ゆう月（18:00～）
1月25日（土）**第4回景観まちあるき**【麻布】
2月25日（火）**第5回景観研究会**（16:00～18:00）オンライン会議
3月29日（土）**第5回景観まちあるき**【三軒茶屋】

三軒茶屋を歩く

豊村泰彦

■住みたい街ナンバー1（ワン）

先日ネットで「東京・世田谷区にある三軒茶屋というエリアは『住みたい街ランキング』でナンバー1である」という調査結果を見つけた。いったいどんなところが人気なのであろうかいささか気になった。50年ほど前までその近くに住んでいた者としては納得できる部分もあり、そのへんを追及してみる。たぶん街のあちこちに少々いい加減な部分があり、そこがかえってなにかとストレスが溜りやすい現代社会にあって癒される場になっているのではないかと解釈した。しかし、「いい加減」なところは東京や関東にもいっぱいあるのにどうしてそこがトップなんだろう？東京はとくに人口過密であり、変化やテンポが速い、店に入ってもスマホを使わないと注文ができない時代である。そんな時代にあって、まだ昭和のテンポが維持されているところがある。それはすごく貴重なことではないか。



●三角地帯の呑み屋街

21世紀、AI技術の導入によって私たちはますます便利で安全な社会を手に入れることになっていく半面、高齢者および高齢進行中の人にとっては楽しい感覚が遠ざかるになる気がしている。それが平成以後の社会である。そしてその社会形態はコンプライアンスの社会でもある。昭和感覚や前時代の感覚で仕事をしたり、日常の活動をすれば本人が楽しんだだけ「セクハラ」「パワハラ」というレッテルを頂戴することになる。だから24時間常に気を使って生きていかねばならない。テレビ局だろうと、映画アヅクリの現場だろうとコンプライアンスの呪縛からは逃れられない。楽しくなる場や範囲はどんどん狭まっている。守れるのは自分の家だと思ったら大間違い。家庭にもまもなくコンプライアンスの領内に入る。しかし三軒茶屋はそこまで気を張らなくても住め

る所だ。カジュアルの範囲が広い。靴を履かなくてもいい。サンダル履きでいい。ネクタイをスカーフに変えてよい。沢田研二の「勝手にしやがれ」つい口ずさんでしまう。少しなら羽目を外してもいいかなと思える自由さがあるのが三軒茶屋である。

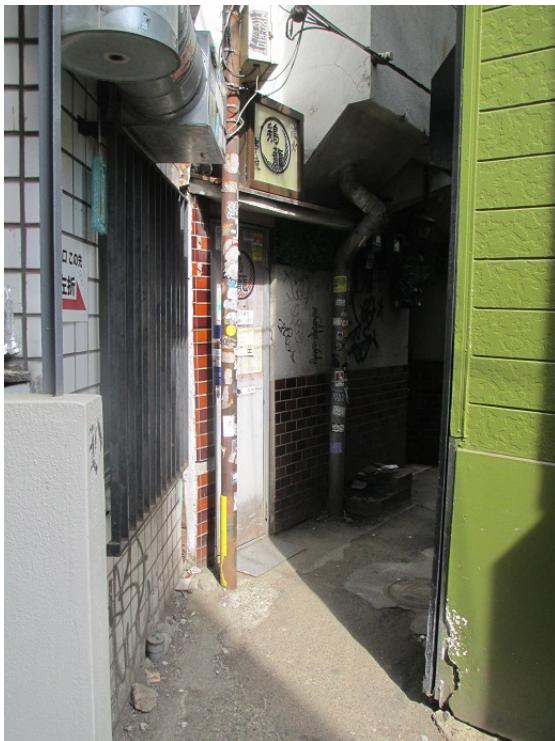
■昭和の街



●ダイナミックな広告

そう、三軒茶屋は今でもずっと昭和の街である。もう東京はほとんど平成、令和の街へと脱皮していった。みな解っているのだ。その中にあって、「三軒茶屋を眺めてその繁盛ぶりを見よ」と敢えて言わなくてもいい。今や「昭和最強のまち」として認知されたのだ。では三軒茶屋らしさはどこにあるのか?、それは駅周辺から「らしい」というエリアの一部にあり、人の目を気にせず自由にやろうよ」という態度が許されている場所がある。それだけで、元気が出る単純な人々もいるのだ。かつてニューヨークも無法化している酷いところも一部にはあったかもしれないが、ストレスを発散するところがあったから新しい文化やアートが生まれ、魅力的な街になったのではないか。そういう視点で三軒茶屋をもう一度眺めてみたい。

■三角地帯



●ねじ曲がった通路

歴史的なことを少し述べると、三軒茶屋は江戸時代中期ごろから交通の要衝として栄えていたが、戦後になると間もなく「闇市」という如何わしい場所がつくられた。「三角地帯」と呼ばれる一角には、今もなお飲食店をはじめとして小さな商店が軒を連ね、昭和レトロな面影を多く残している。

三角地帯というのは、国道246号線（通称二一ヨンロク）と世田谷通りが、二股に分かれるエリアをいつからかこう呼び、そこは、昔ながらの居魚屋・食事処が、所狭せましとひしめき合っていいる場所。狭い地帯に道路や店が不規則に並んでいるために迷路のようになっているところもあり、始めて訪ようとする人には少し勇気がいるところだ。



●選挙ポスター？

三角地帯のルーツはヤミ市だったということはすぐ想像がつく。昭和24年にアーケード「エコ一仲見世」ができる、商店街が生まれた。しかし東京オリンピックの開催を境に街は大きく変化する。国道246号線の拡張。渋谷から三軒茶屋までの玉電（東急世田谷線の一部）の廃止、首都高速道路の開通があり、街は大幅に変わった。しかし、そのような急速な時代の変化に乗り切れず（乗る気もなかったと思う）、まるで時間が止まつたままになっているのが、この三角地帯である。



●人生いろいろ、街もいろいろ

狭い路地というのは他にもたくさんあるが、この三角地帯の路地は、狭いだけでなく渋茶苦茶に不規則である。曲がりくねっていたり、道幅が極端に狭くなったり広くなったりして、先が見通せない。行き止まりだとしてもたいていは抜けられる。そして狭い場所にもお店がある。狭いエリアなので、紛れ込んでも迷うことはないが、初めての人がこの路地で行きたい店を探すには苦労するかもしれない。とにかくやみくもに歩き回るしかない。そのうちに、偶然目指す店に遭遇する。またはいきなり開けた場所に出たと思ったら三角地帯の外だったなどということはよくある。路地は閑市時代に自然にできた通路で、効率性や規則性とは無縁の世界だ。このように三角地帯は、「三茶」の生活空間の一部として、独特の文化が育まれてきたのである。

■かつて映画街



●看板だけが残った映画館跡

私が映画というものを始めて観たのは、まだ小学生に入ったばかりのころである。両親に連れられ、三軒茶屋に家族全員で観に行った。映画館で最初に観た映画は時代劇（当時は「チャンバラ映画」と言っていた）である。両親が好きだったので大川橋蔵が出演していたようだ。その後、映画「ゴジラ」を家族で見に行った。ゴジラが上映されたのは1954年、2年後には第2作目が上映された。観たのは2作目であるが小学校に上がる前である。それを観たときのショックはたいへん大きく、その恐さに泣き出しちゃった。とにかくそのころまだテレビも入っていない、映画が作り物ということが解からない子供だったので、その後遺症は大変だった。ゴジラは現実にいる怪獣だと思い込んでしまったのだ。PTSD並みに、頭に焼き付いてしまったことは確かで、以来「ゴジラ」の夢を何度も見るようになり、夢の中でゴジラに追いかけまわされる悪夢に悩まされた。

その後テレビが家庭に普及すると娯楽は映画からテレビに移ったが、その後も時々三軒茶屋に映画を見に行った。映画はテレビと違って画面も音も大きく迫力があった。また、大きな看板やポスターが貼ってある劇場の雰囲気が好きで、観る前からぞくぞくして、映画の素晴らしさ面白さを感じた。

そのころ三軒茶屋には映画館がたくさんあった（5から6館くらいかそれ以上あったと思う）が、三角地帯に接する世田谷通から少し入ったところに当時は数館が集中していた。年数を重ねるごとに映画館はつぎつぎ姿を消し、全国的に映画館が少ない状況になっても三軒茶屋では最近まで2館が上演を続けていた。しかし、10年前に「三軒茶屋シネマ」が閉館したのを最後に三茶の映画館はすべてなくなった。「三軒茶屋シネマ」の建物は肉のハナマサの店舗に代わったが、ハナマサの看板の後ろには今も、当時の「三軒茶屋シネマ」の看板が残っている。なぜ今なくなった映画館の看板が残っているのか。それがこの三角地帯を象徴している特殊性なのだろう。

■ 錢湯



● 錢湯の煙突

三角地帯に大きな煙突が立っている。銭湯の煙突だということは一目でわかる。そこは呑み屋街からすぐのところにある昔ながらの銭湯「千代の湯」（現在営業停止）である。呑み屋街の小径を煙突を探しながら歩くと見つかるという。確かに迷路の三角地帯にあってはその建物の入口や場所はよくわからないが、この煙突をたどれば銭湯に行きつくことができる。煙が出ているから銭湯の煙突なのだが、煙が出ていなければこの煙突は仏塔と見てもよい、そして銭湯自体も古代の修道院であると想像する。

世田谷区に住んでいた時は東急世田谷線若林駅近くの銭湯と世田谷通りと環状7号線が出来る前の通りの十字路のあたりにあった銭湯の2軒を利用していた。後者の銭湯は風呂が檜製で木のいい香りがした。木の風呂屋の向かい側には駄菓子屋があり、よくそこへ10円玉を握りしめて駄菓子や当時流行ったメンコを買いに行ったのを覚えている。三軒茶屋の銭湯は残念ながら入ったことはないが、今考えると銭湯のすぐ近くに居酒屋があるなんてなんと素晴らしい環境だったのだろう。

■第2の三角地帯



●雑然とする中に整頓あり

三軒茶屋には三角地帯がもう一つある。玉川通りを底辺にして2等辺三角形のような道が突き出している地域だ。三角地帯の中はほぼ住宅地だが、囲んでいる道の周辺には商店や飲食店がぎっしり立ち並ぶ。こちらは第1の三角地帯ほどディープな雰囲気はなく、新時代の感覚やスタイルを取り入れた落ち着いた店舗が立ち並び、こちらは家庭的で落ち着いた商業空間が出来上がっている。店もほぼ建て替えられて清潔感があり、昭和文化の中に若干平成文化も交じっている。

ここもやはり飲食店が多い。例えば都内でも少なくなったレコード店やジャズ喫茶（カフェ）がこのエリアにある。二つの三角地帯を比較してみると、第一の三角地帯は戦後間もない復興時代の街、第二の三角地帯は高度成長期時代に造られた街というところか。ここも第一同様、懐かしきお店がたくさんあり、片っ端から全部入りたくなってしまうほどである。この二つの三角地帯は掘れば掘るほど面白いものが発見できそうなので、時々は顔を出してみようと思う。



●アナログレコードがかかるジャズ喫茶

<LFJブックレビュー 88>

『長谷川潔 白昼に神を見る』 長谷川仁・竹本忠雄・魚津章夫編

1991年 白水社刊

齊藤全彦

長谷川潔（1891-1980）という名は同じ版画家で名を馳せた棟方志功（1903-1975）と比べると、あまり知られていない。それは両者が持つ画題の違いか、生き方の違いか、それぞれの持つ強い個性が自ら発散する何かによってかもしれない。二人は日本を代表する版画家でありほぼ同時代を生きたが、その生き方は全く異なるものであった。棟方志功は青森の刃物鍛冶を営む家に三男として生まれ、片や長谷川潔は第一国立銀行横浜支店長の父のもとに長男として横浜に生まれた。日清戦争が1894年、日露戦争が1904年に起こったことを鑑みれば、時代はまさに日本が国家として世界に近代化を成し遂げつつあることを示そうとした明治の後半という頃合いであった。1919年4月4日パリに到着した長谷川潔は長くヨーロッパに留まり、フランス文化勲章を受章するほどの成功を収めながらも、1980年京都国立近代美術館において自薦作品による「銅版画の巨匠・長谷川潔展」の開催を最後に、何故か分からぬが生前は一度も日本に戻らない生涯であった。

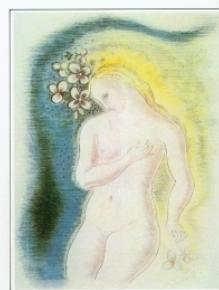
「それは、今次大戦中の事だった。……その朝も遠くの雲を眺めたりしながら、いつも通る道を歩いていたのだったが、不意に一本のある樹木が燐然たる光を放って私に語りかけてきた。「ボンジュール！」と。私も「ボンジュール！」と答えた。するとその樹が、実に素晴らしいものに見えてきたのである……。」（『断章』）長谷川潔の数ある版画の中で、マニエール・ノワール（黒の技法）の作品を鑑賞していると、上にあげたような言葉が浮かんでくる。そこには、「絶対の黒と純粹な白の鮮やかな対照」（ロール・レイ）としてあらゆる存在が生きてくるのである。

日本の江戸時代後期の芸術が、フランスのそしてヨーロッパの近代芸術へ与えた影響は計り知れないが、21世紀になる現代までその影響を与え続けている芸術家はそう多くはない。その中でも長谷川潔ほど、現代芸術へ、即ち「芸術における存在と時間」という問いかけに対して影響を与え続けている芸術家は他にはいないだろう。長谷川が「私は、『美』を生み出している宇宙の法則と心理を探求しているのです。」と言うとき、まさに21世紀の現代に、美を以て世界の謎に応えようとしているのが長谷川潔の芸術だと言えるのではないか。

長谷川が生み出す「黒」という色は色であって色ではない。それは、宇宙というこの何億光年もある世界の「存在」を示しているのであり、「白」はその宇宙のどこから飛び込んで現れる光の数々を示しているのである。「魔術師長谷川にとって、地上に存在するあらゆるもののが、宇宙のリズムに従っている。……この瞑想家はかの精妙で味わい深い言語つまりは版画というポエジーにあふれる芸術言語で答えるのである。」（C・クンスレール著『神秘の示顕者』）

我々が景観を語るとき、忘れてはならないのが、目に入る存在するすべてに対して敬意を以って接し、そして、あらゆる存在に対し長谷川潔が示したように、存在する対象物は唯一無二の存在であることを自覚することが必要ではないだろうか。

長谷川 潔 白昼に神を見る

長谷川 仁・竹本忠雄・魚津章夫
共編

白水社

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町14-5-502
TEL: 03(3780)3814
FAX: 03(6379)6681
E-mail: info@keikan-forum.com
URL: <https://www.keikan-forum.org>

